

## 地域レポート

## 国頭村における発達が気になる子を支える体制づくりの取り組み

国頭村役場

保健師 荒木善光

## 1 はじめに

平成17年に発達障害者支援法が施行されたことにより、地方公共団体に発達障害の早期発見・早期支援と切れ目ない支援体制を整備することが位置づけられた。また、健やか親子21（第2次）では、すべての子どもが健やかに育つ社会の実現をめざして、「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」を基盤に、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」が重点課題の一つに挙げられている。各地で様々な取り組みがなされているが、国頭村において、関係機関の連携のもと、発達に課題を持つ子どもが地域の中で個人の特性を持ちながら、安心して社会生活を営むことができるように取り組んできた活動について報告する。

## 2 地域の概要

国頭村は沖縄本島最北端に位置し、村の大部分が山林原野で占められ、人口4,922人<sup>1)</sup>、年間出生数30人、低出生体重児数1人である<sup>2)</sup>。出生率（人口千対）では、沖縄県が11.6、北部保健所管内が10.5であるのに対し、国頭村は6.2と低くなっている<sup>2)</sup>。百日祝、豊年祭など文化風習を通じた地区ごとの集結が強く、住民がお互いに助け合っていく相互扶助の精神である「ゆいまーる」が生活の中に根付いている地域でもある。未就学児数及び小学校就学児童数では年々減少しており、未就学児の約8割が保育所・幼稚園に通っている現状がある。その中でも小規模地域では、保育所や小学校の複式学級や地域の行事等にて様々な年齢層との関わりを持つ機会が多く、周りの人々の配慮のもと、ありのままの姿で受け入れられ、のびのびと育っている子ども達もいる。

このような地域性がある一方で、地理的特性から利用可能な療育施設等の社会的資源が限られているため、顔のみえる人と人とのつながりを重視した「きめ細かい支援」が必要となっている。

国頭村における平成26年度乳幼児健診の受診率は、乳児が89.1%（沖縄県：89.5%）、1歳6か月児が97.5%（沖縄県：88.8%）、3歳児が86.1%（沖縄県：85.1%）である。また、「子育ては楽しいですか」という問診項目に対して、子育てを「大変だけど楽しい」と回答する人は、乳児が41.4%（沖縄県：62.8%）、1歳6か月児が61.5%（沖縄県：68.9%）、3歳児が81.4%（沖縄県：69.8%）であり、年齢が上がるごとに増えている。この「大変」という具体的な内容をみると、1歳6か月児では「おちつきがない・ぐずることが多い・かんしゃくが多い」「仕事と子育ての両立」などで、3歳では「自分の思い通りにならないとパニックになる」「言葉で言い聞かせることが難しい」などが挙げられている。さらに、「子育てに不安がありますか」という問診項目に対して、「不安がある」もしくは「不安が時々ある」と回答した人の具体的な内容をみると、1歳6か月児では「こだわりが強い・ひとみしり・食事の好き嫌いが激しい」「言葉の発達が気になる」「子育てで怒ってばかりいる」などで、3歳児では「指しゃぶり・奇声を出す・落ち着きがない・力加減ができない・言葉がはっきりしない」「本人に対する関わり方でどこまで指導したらいいかわからない」などが挙げられている。これらは養育者からの聞き取り内容をまとめた形で記載しているが、「育てにくさ」からくる不安や大変さを訴える養育者の声が挙げられている。子どもの発達や特性に対する周囲の理解や配慮

不足による二次障害が出てくる可能性があり、発達が気になる子を支える体制づくりが課題となっている。

### 3 活動とその結果の検討

これらの地域特性のある国頭村では平成23年度から巡回支援専門員整備事業を実施してきた。この事業は、発達障害等に関する知識を有する専門員が保育所等の子どもやその親が集まる施設・場を巡回し、スタッフや親に対し、障害の早期発見・早期対応のための助言等の支援を行うもので、名護療育医療センター（旧：名護療育園）に委託し、実施している。現在の支援内容としては、1）保育所・幼稚園へ2か月間に1回の定期的な巡回訪問による園児の様子観察と保育士等との相談、2）乳幼児健診会場へ言語聴覚士等を派遣し、気になる児へのフォローや養育者への相談、3）随時、専門職による巡回や相談である。施設の巡回には、村の保健師が同行することにより、施設スタッフと保健師間の関係性が円滑になっている。さらに平成27年度からは福祉課に配属されたスクールソーシャルワーカーも施設巡回に同行することにより、未就学から関わりを持ち、就学した際の育ちを支える一貫した支援が可能となっている。保育所等で直接支援を行っている保育士や幼稚園教諭と巡回相談員が定期的に相談できる場を持つことで、気になる子どもの特性の理解、関わり方、支援の方向性を確認できるようになった。実際に先生方が子どもと前向きに関わっている姿や子どもの困り感に基づいた具体的な支援に関する意見が増えてきており、その子らしく成長し、生活することができる環境が整いつつある。また、精神発達に何らかの課題を持つ子どもの早期発見・早期支援に加えて、関係者間で養育者の受け入れなどのタイミングを図る「途切れない支援」にもつながりつつある。

この流れにあわせて、平成25年度から北部圏域地域自立支援連絡会議療育・教育部会と連携して、村内における発達障害児者支援体制整備に取り組んできた。1年目は未就学児を中心とした保育所と幼稚園との連携、2、3年目は小中学校との連携強化を実施した。1年目は年に3回の作業部会にて各機関が抱えている課題について共有・検討し、発達の気

になる子についてのライフステージごとの支援体制について整理した。2年目以降は研修会や年に2回程度実施する作業部会にて、特別支援教育コーディネーターや養護教諭と事例検討を行った。圏域の療育・教育部会と連携することにより、村内の発達障害児者支援体制整備の活性化に繋がった。また、村内の実務者以外の関係者が加わることにより、保育・保健・教育機関等の関係者が円滑に連携でき、村内における子どもの育ちを支える体制図とそれに関連する関係者用のマニュアルを作成した。今後も多くの改善の余地はあるが、平成28年度からは国頭村障害者自立支援協議会の子ども専門部会としてこの流れを主体的に実施していく予定である。

### 4 おわりに

地域における保健活動は地域特性も異なるため、同じ手法をとってもその地域に根付いていく活動となりえるとは限らない。沖縄本島北部地域の療育システム<sup>3)</sup>について報告された名護療育医療センターの泉川良範先生や「Go to the people」の詩<sup>4)</sup>を紹介された石川信克先生も述べられているが、地域や子ども達への優しいまなざしをもとに、今あるものに工夫し、積み重ねていくという関係者の姿勢が重要である。そして、子ども一人一人の個性にあった子育てを実現するためには、周囲のサポートが必要であり、発達障害の診断の有無に関わらず、子育てに何らかの悩みを持つ段階からの親へ寄り添う支援が大切である。これまで取り組んできた活動が将来の子ども達の成長の一助になることを切に願っている。いつまでも子ども達の元気な声が響き渡る国頭村であってほしい。

### 5 文献

- 1) 総務省統計局. 平成27年国勢調査
- 2) 沖縄県保健医療部. 平成26年衛生統計年報（人口動態編）
- 3) 泉川良範. 北部の療育システムについて. 沖縄の小児保健 2008 ; 35 : 73-75.
- 4) 石川 信克. 「Go to the People」の源流を訪ねて. 国際保健医療 2012 ; 27-2 : 111-117.